

## 現代ギリシア語の有声閉鎖音について

鈴木 博之

## 1 はじめに

現代ギリシア語では、古典期には閉鎖音であった  $\beta$ ,  $\gamma$ ,  $\delta$  が単独では摩擦音化し、それぞれ  $[v, \gamma, \delta]$  と発音されている。そして現代の正書法では、有声閉鎖音を表記するために語頭では  $\mu\pi$ -,  $\gamma\kappa$ -,  $\nu\tau$ -, 語中では  $-\mu\beta$ -/ $-\mu\pi$ -,  $-\gamma\gamma$ -/ $-\gamma\kappa$ -,  $-\nu\delta$ -/ $-\nu\tau$ - で示されるように、 $\gamma$  を除き<sup>1</sup> つづり字上鼻音字を用いるようになった。また、その鼻音字が単なる書記上の記号でなく 1 個の音として発音されたり、前鼻音化して発音されたりもする (Tζιτζιλης 2000, Holton 1997)。さらに語中では、常に有声閉鎖音は鼻音に後続する位置にしか現れないとも言われている<sup>2</sup>。Γεωργίου (2000) では、このようなつづり字と発音の対応しない例について「正しい発音」を示しているが、語頭では完全な有声閉鎖音を、語中では有声閉鎖音のみの発音となる例を除いて鼻音+有声閉鎖音になるという発音を支持している。

本論文では、このような状況にある現代ギリシア語の有声閉鎖音の音声的な性質について実際のギリシア語の音声資料に基づいて、特に鼻音の出現について考察する<sup>3</sup>。

## 2 つづり字と一般的な発音

以下に問題となるつづり字と実際の発音との関係を、基底形概念を用いて示す。

## 2.1 語頭の場合

語頭では「鼻音+閉鎖音」という連続は許されない<sup>4</sup>ので、つづり字  $\mu\pi$ -,  $\gamma\kappa$ -,  $\nu\tau$ - が基本的に  $[b, g, d]$  に対応するが、実際は以下の異音<sup>5</sup>が現れる。

語頭では 3 種とも完全有声<sup>4</sup>、鼻音先行<sup>5</sup>、半有声<sup>6</sup> の 3 つの異音が存在する。

つづり字	発音記号
μπ-	[b, <sup>m</sup> b, <sup>ɸ</sup> b]
γκ-	[g, <sup>ŋ</sup> g, <sup>ɰ</sup> g]
ντ-	[d, <sup>n</sup> d, <sup>ɳ</sup> d]

それぞれは多く発話速度に依存し、語彙的、地域的差異ではなく、話者個人の特徴でもない。遅く丁寧に発音されるほど完全な有声音になる傾向がある。

語頭において鼻音が閉鎖音に先行する場合、語中よりもはるかに短く発音され、確実に認識するためには注意深い聞き分けが要求される。半有声とは、正確には閉鎖音に先行する弱い鼻音の無声化であると考えられ、非常に無声の部分が少ない。そのためこのような音声について言及している文献は数少ない。

## 2.2 語中の場合

語中では語頭よりも複雑な分布をなす<sup>7</sup>。有声閉鎖音を含む音声を表すつづり字には、基本的に-μβ-/ -μπ-, -γγ-/ -γκ-, -νδ-/ -ντ-の各2種ずつある。それぞれ調音点ごとに「鼻音/+/有声閉鎖音/」の基底形を有し、以下のような異音が見れる。

つづり字	基底形	発音記号	バリエーション*
-μβ-/ -μπ-	/m/+/b/	[mb, <sup>m</sup> b, b]	-μψ-, /m/+/b/+/z/, [-mbz-, -m <sup>b</sup> s-]**
-γγ-/ -γκ-	/n/+/g/	[ŋg, g, <sup>ɰ</sup> g]	-γξ-, /n/+/g/+/z/, [-ŋgz-, -ŋ <sup>g</sup> s-]**
-νδ-/ -ντ-	/n/+/d/	[nd, <sup>n</sup> d, d]	

ここで基底形の音声実現について、/m/+/b/を例に述べる。

### 1. [-mb-]

「完全鼻音+完全有声閉鎖音」の連続になる。本来的なギリシア語の語彙およびその要素からなる語形成、借用語に多く確認される。

### 2. [-<sup>m</sup>b-]

弱い鼻音が完全有声閉鎖音に先行する。出現環境は現在のところ簡単には言及できないが、[-mb-]の実現を持つ語彙の異音として現れうる。

### 3. [-b-]

鼻音が脱落し、完全有声閉鎖音のみになる。最近の外来語のいくらかは、この音声実現のみである。それ以外の語彙でも、発話速度が速い場合に確認される。

また、派生語の中には本来のギリシア語であっても条件によっては鼻音を伴わないものもある<sup>8</sup>。-γγ-は特徴的なことに、通常は[-ŋg-]であるか鼻音が完全に脱落するかのどちらかで、鼻音が先行することは話者の個人差であることが多い。よって先行鼻音を含む異音は -μβ-/μπ- と -νδ-/ντ- に比較的多く現れることとなる。

以上のことを踏まえたうえで異音の出現傾向を述べるなら、ギリシア語の本来語において語中における異音で最も多く聞かれるものは「鼻音+有声閉鎖音」の組み合わせである。外来語の場合は、起源的に鼻音字と閉鎖音字の両方を持つ語 (ex. παντελόνι < イタリア語 pantalone) はこのように発音されて当然であろうが、実際は前鼻音化した異音の出現が確認される。また、1個の有声閉鎖音を表すために鼻音字を用いて表記された語 (ex. στούντιο < イタリア語 studio) では、鼻音は多く前鼻音化要素として発音され、時には脱落する。しかし場合によっては完全な1つの子音としてとらえられ、はっきりと発音されることもある。

その次に多く聞かれるものが先行鼻音が付加されたもので、鼻音は閉鎖音の調音前に軽く挿入される程度である。また、一切鼻音を読まない場合については、特定の外来語 (ex. βίντεο < video) に安定して見られる一方、ギリシア語本来の語彙でも十分に出現しうる。

また、特定の語彙 (ex. κομπανία < イタリア語 compagnia, αντένα < イタリア語 antenna) において、-μπ-, -ντ-では鼻音+無声閉鎖音 [-mp-, -nt-] が現れることがあるほか、鼻音字の次に形態素境界が来るギリシア語本来の語彙の中の -μβ-, -νδ- は鼻音+有声摩擦音 [-ɱv-, -ɳð-] と分けて発音される傾向が強い (Παπακωνστατίνου 1979, Ινστιτούτο Νεοελληνικών Σπουδών 1996)。このような例としては、συνβαίνει, ένδεκα などがある。

### 2.3 その他の場合

以上のように、明らかにつづり字として現れる有声閉鎖音以外に、語彙内部ではなく、句、文単位でまとまる場合にも次のように有声閉鎖音が出現する。

- τον, στην などの冠詞、前置詞 + κ-, π-, τ-, ξ-, ψ-

このような場合、実際は無声音であるはずの語頭が有声化する。多く半有声となるが、それは本来の語頭の音が十分同化していないためである。変化が起きない場合もある。ただし、松本(1988)のように音韻上鼻音の後では常に有声閉鎖音が現れるという見方もあるが<sup>9</sup>、個人差があり完全有声や半有声もあれば無声のままのこともある。

例: για την καλωσύνη, στην πανεπιστημίου, την κοπέλα, τον ξένο, δεν ψωνίζω

Γεωργίου (2000) は、いずれにしても語と語の連続が冠詞類など無アクセント語末-v + 無声閉鎖音ならば、無声閉鎖音が有声化することを推奨している。

### 3 ギリシア語における「鼻音 + 有声閉鎖音」の解釈

#### 3.1 前鼻音または前鼻音化について

鼻音が閉鎖音の直前に軽く挿入される現象を前鼻音化というが、それが何を表すものなのか定義しておく。前鼻音を持つ言語としては、アフリカの諸言語特にバントゥー諸語などが知られているが、それらの言語で前鼻音か通常の鼻音 + 閉鎖音の連続かを分けるのは鼻音の長さによるとされ、前鼻音というのはその持続時間が極端に短いといわれている。それとともに、語中においては鼻音と有声閉鎖音の間が音節の境界として分割できるかどうかとも議論される場所である。たとえばスワヒリ語では、有声閉鎖音と前鼻音化有声閉鎖音とは音素として対立する要素で、前鼻音が現れる場合は有声閉鎖音の一部をなすので、両者の間を分かつことはできないと考えられる (Ohly 1998)。

以上のことから、ここでは後続する有声閉鎖音の調音の開放前に、閉鎖音に従属する形で各調音点における鼻音相当音がわずかに挿入される現象を前鼻音とする。なお、ギリシア語における前鼻音の出現に言及している文献には、Holton (1997) がある。

#### 3.2 音声調査とその結果

ここから実際に音声調査を行った結果とその解釈を示す。使用した音声素材はいずれも学習者用の録音テープで、初級用の荒木 (2001)、木戸 (2002)、初中級用の荒木 (1990)、Kedra-Blayo (1996)、中上級用の Δημητρά (1989) を用いた。また、正音法に従った発音の録音が付属している Γεωργίου (2000) の音声資料についても、例語を補うために参考にした。なお、調査できた語彙は次節でまとめて挙げる。

##### 3.2.1 語頭の場合

前述のように現代ギリシア語では、本来的に語頭に有声閉鎖音が立たないように音変化を起こしているが、語頭音節の脱落や外来語の流入によってつづり字上鼻音字から始まり有声閉鎖音として発音される語彙が相当数存在する。これらの語彙において、純粋な有声閉鎖音だけでなく鼻音が作用する場合すなわち前鼻音化有声閉鎖音として現れる場合もあり、実際にどのような発話環境で現れるか、以下のような分類ができた。

### 1. 第1音節アクセント語の場合

先述のすべての異音がありうるが完全有声であることが多く、先行鼻音の無声化現象はごく少数のみに確認できた。

### 2. 第2音節アクセント語の場合

先述のすべての異音があり、かつ平均して分布しているので分けて述べる。

#### (a) 完全有声閉鎖音

この音声で実現されるのは、ゆっくりした発話時であるか個人差による可能性が高い。前者は統計的推測であり、後者はさらに多くの資料に当たる必要がある。また、比較的新しい外来語の場合はほとんどこの音声で実現されていることも確認した。

#### (b) 前鼻音化有声閉鎖音

通常の発話速度の場合、この音声がよく聞かれる。鼻音はほとんど聞こえない程度の長さであるが、確認は可能である。

#### (c) 無声前鼻音化有声閉鎖音

前者と並び、通常の発話速度ならばよく聞かれる。こちらのほうが今回の調査内では出現する数が多かった。単純な半有声閉鎖音と似ているがやはりまったく違う音質を持っている。

### 3. 第3音節以降にアクセントのある語の場合

第2音節アクセント語の場合での完全有声閉鎖音の出現条件を除けば、ほとんどが無声前鼻音化有声閉鎖音で実現される。有声性が失われつつある傾向が確認できた。すなわち、この場合の前鼻音は無声で持続する時間が上の場合よりほんの少し長い。

この結果は、アクセント位置が実際の有声閉鎖音の音声に影響を与えていることを明示的に表している。ギリシア語における語頭での鼻音の出現は、理論的側面からすべて前鼻音とみなさねばならず<sup>10</sup>、実際音声的にも前鼻音と呼ぶにふさわしい音声的性質を持っていることが言える。

#### 3.2.2 語中の場合

語中においては、一部の外来語 (ex. *avtlo* < イタリア語 *addio*) を除きほぼ鼻音が現れることが確認されている。どのような環境にある有声閉鎖音の前で鼻音が確実に発音されたり軽く発音されたりするのかについて、以下のような分類ができた。

## 1. ギリシア語本来の語彙（古典期からある）の場合

### (a) アクセントが落ちる音節にある場合

発話速度がゆっくりならば、ほとんどの例で音節境界がはっきりするほど鼻音と有声閉鎖音とが連続して聞こえる。通常の発話速度のときは、話者によって鼻音を完全に保つ場合と前鼻音を添える場合とに分かれる。鼻音が聞こえない例は確認されなかった。

### (b) 先行の音節にアクセントが落ちる場合

ほぼ音節境界が分かるほど鼻音と有声閉鎖音とが連続して聞こえる。発話速度が上がるにつれて前鼻音化する傾向があるが、完全に前鼻音と呼べるほど短くならず、一定の長さは保持されることが多い。語彙によって鼻音が脱落するものも存在する (ex. τριάντα)。

### (c) アクセントが1つ後ろの音節にある場合

発話速度がゆっくりならば、かなりの例で音節境界がはっきりするほど鼻音と有声閉鎖音とが連続して聞こえる。しかし少々長めの前鼻音として発音する話者もいる。発話速度が上がるにつれて前鼻音化する傾向が強い。時には鼻音そのものが脱落することもありうる (ex. πενταχόσιοι)。

### (d) アクセントが2音節以上後ろにある場合

発話速度がゆっくりならば、かなりの例で音節境界がはっきりするほど鼻音と有声閉鎖音とが連続して聞こえる。その場合を少々長めの前鼻音として発音する話者もいるが、語彙によっては完全に鼻音が脱落する場がある。発話速度が速ければほとんどの例で前鼻音化または鼻音が脱落するが、話者によっては鼻音として保つ場合もある。

## 2. 古くからの借用語の場合

語彙によって鼻音を読まないものが存在する (ex. μπαμπάς)。以下ではそれ以外について述べる。

### (a) アクセントが落ちる音節にある場合

上述 1-(a) の場合とほぼ同様だが、早く話される場合に鼻音が脱落するものがある。

### (b) 先行の音節にアクセントが落ちる場合

上述 1-(b) の場合とほぼ同様だが、借用元が鼻音+有声閉鎖音ならばそれを維持することが多い (ex. Ούγγρος)。

(c) 後続の音節にアクセントが落ちる場合

上述 1-(c) の場合とほぼ同様だが、ほとんど借用元の発音を維持する。

3. 最近の外来語の場合

借用元の言語における発音を維持する場合が多い。すなわち、完全有声閉鎖音か鼻音+完全有声閉鎖音または鼻音+完全無声閉鎖音のいずれかである。

以上のように語中にある場合では、語彙の由来が関わっていることがいえる<sup>11</sup>。特に最近入った外来語の場合は目立ち、つづりにおいて鼻音字が単なる記号として解釈されていることが分かる。そして語頭の場合と同様に、多少なりともアクセントの関わりを認めることができるといえる。

また、発話速度がゆっくりの場合は、アクセントに関わらず多く鼻音+有声閉鎖音が現れる。これは有声閉鎖音が鼻音の後にしか現れないという、最も基本的な状態であり、丁寧な発音はそれを実現する。しかし通常速度であれば、アクセントの影響も入って異音が出現しうが、語彙による制限が加わる。

以上の調査結果が示すことは、ギリシア語における有声閉鎖音の異音の分布をアクセント位置、発話速度および語源の観点から分類できることである。用いた音声資料はいずれも丁寧な発音と通常の会話における発音とが分けられて録音されており、その点を利用して速さの側面から音声的差異を観察した。確かにこのような音声資料では「作られた発音」になってしまい、自然な発音でないということが指摘されるが、発話速度をはかるには適当な資料であると考えられる。

## 4 実例

先にまとめた事柄について、音声資料で調査できた実際の語彙を挙げる<sup>12</sup>。順序は前章のものと対応させてある。語末に\*がついた語は Γεωργίου (2000) による。

### α. 有声閉鎖音が語頭の場合

1. 第1音節アクセント語の場合

μπαίνω, μπάνιο, μπάλα, μπήκατε, μπλέκομαι, μπράβο, γκαζ, γκριζος, γκέμια\*, ντίνω, ντους, ντάλια\*, ντίζελ\*, ντάμα\*, κ.ά.

2. 第2音節アクセント語の場合

μπακάλλικο, μπαλλόνι, μπαμπάς, μπερντές, μπουκάλι, μπορώ, μπροστά, γκαρσόν, γκρενά\*, γκαζόζα\*, ντομάτα, ντουλάπι, ντροπή, ντουλάτα, κ.ά.

### 3. 第3音節以降にアクセントのある語の場合

μπαταρία, μπερδεμένος, γκοιωίες, γκαρσονιέρα\*, ντελικάτος\*, κ.ά.

## β. 有声閉鎖音が語中の場合

### 1. ギリシア語本来の語彙（古典期からある）の場合

#### (a) アクセントが落ちる音節にある場合

κουμπί, γαμβρός, κολυμβώ, αντάμωση, θαμπώνω\*, αγχώνας\*, παντού, παν-τεύει, εντάξι, κ.ά.

#### (b) 先行の音節にアクセントが落ちる場合

κολύμπι, λάμπω, πέμπω\*, άγγελος, σπόγγος, άγκυρα\*, κέντρο, τριάντα, άνδρος, δένδρο, άντρας\*, φωνήεντων\*, κ.ά.

#### (c) アクセントが1つ後ろの音節にある場合

συμπληρώστε, σημαντικός, εμπειρία\*, συγγνώμη, συγγενείς, παραγγε-  
λίες, συνταγές, καλοντιμένος, παντρεμένος, φαντασία, κοντινότερο,  
κ.ά.

#### (d) アクセントが2音節以上後ろにある場合

ολυμπιακοί, συμπαθητικός, επαγγελματικό, εγκαταστάσεις, συγκοινω-  
νία\*, εντυπωσιάσετε, αντιμετωπίζει, ανταμοιβή\*, κ.ά.

### 2. 古くからの借用語の場合

#### (a) アクセントが落ちる音節にある場合

μπαμπάς, μπεμπέ\*, μπερντές, κ.ά.

#### (b) 先行の音節にアクセントが落ちる場合

λάμπα, Σεπτέμβριος, Νοέμβριος, Ούγγρος, στούντιο, κ.ά.

#### (c) 後続の音節にアクセントが落ちる場合

παντελόνι, Κωνσταντινούπολη, κ.ά.

### 3. 最近の外来語の場合

#### (a) 完全有声閉鎖音

τουρμπίνα, ταμπέλλα\*, ταμπού\*, γκολφ\*, βίντεο, αντίο, μοντέρνος\*,  
κ.ά.

#### (b) 鼻音 + 完全有声閉鎖音 ~ 前鼻音化有声閉鎖音

μπαμπού\*, ραντεβού, βεράντα\*, φόντο\*, κ.ά.



(c) 鼻音+完全無声閉鎖音

χομπλιμέντο\*, χαμπάνια\*, αντίχα\*, κόντες\*, κ.ά.

## 5 まとめ

今回の調査結果から言えることとして、語中における「鼻音字+閉鎖音字」というつづり字が示すギリシア語の正書法上の構造に対し、本来的なギリシア語の語彙や定着した借用語ではそれがそのまま音声に反映される一方、実際話される音声には通常の発話速度であるのに鼻音の音声的価値が失われつつある現状が示されたと考える。このような前鼻音への変化の傾向は、ある種の発音の経済性による余剰要素の脱落と推測できる。ところがギリシア語における有声閉鎖音は、それが音として存在するために鼻音を必要とするがゆえに、比較的新しい段階で現れた語頭ではありえない鼻音+有声閉鎖音の連続に対して前鼻音化の形で鼻音を出現させたり、語中では時によって完全に鼻音が消失することもあるが、脱落する方向に向かう途中段階として、前鼻音化という特殊な音声を持つにいったと推測できる。鼻音の影響の大きさは、古典期からある「鼻音+無声閉鎖音」という構造に対してさえ有声音化を促したことから示されるであろう。結局ギリシア語における歴史的な音声変化は、「鼻音+無声閉鎖音」>「鼻音+有声閉鎖音」>「前鼻音化有声閉鎖音」とたどっていることがいえると考える。しかし、すべての場合において話者それぞれに一定の発音の傾向があり、鼻音の出現に関する特徴が共通して現れるが、さらに多くの音声資料を調査しなければ個人的特徴かそれ以外に要因があるのか結論づけるのは難しいと思われる。しかしながら発音の経済性の観点から見て、脱落させてもよい鼻音を残す可能性が高いという事実は、鼻音の存在の重要性を示しているとともに有声閉鎖音が鼻音と共に現れる構図があることが明確となる結果といえる。

前鼻音化という現象は、ヨーロッパの言語には非常に珍しい特徴の1つである。その点に注目し、実際のギリシア語ではこれがどのように機能しているかを今回確かめられたと考えるが、この現象は個人的な性格が強く、今回の調査段階ではギリシア語の体系として位置づけるべき要素ではないと予測できる。Γεωργίου (2000) は鼻音を発音する語彙ならば発音すべきであると述べているが、しかしながら前鼻音という音が実現される以上、そこに注目してしかるべき点は次のようである。すなわち、外来語における有声閉鎖音がどのように実現されうるか、という点において、前鼻音の出現頻度がギリシア語本来の語彙などと比べ低いことから、何

らかの区別が存在する可能性が見出せる。

この考察を土台にさらに多くの音声調査を行うことで、より精密な有声閉鎖音の特質が明らかになる可能性が残されている。

## 注

1 γはそれ自体重ねて表記されると [ŋg] と読まれる。これは古典期からそのように発音されていたと考えられる。というのは、このつづり字を持つ語彙に相当するラテン語の語彙との対照によって、実際の発音が想定できるからである。

2 古典期にも -μβ-/-μπ-, -γγ-/-γκ-, -νδ-/-ντ- のつづりを持つ語は存在する (ex. συμβουλή, πέμπω, ἄγγελος, ἐγκωμιάζω, ἐνδοξος, ἐνταῦθα)。しかし -μπ-, -ντ- の組み合わせは鼻音+無声閉鎖音であったと推測される。

3 本論では、破擦音 τς[ts], τζ[dz - dʒ] は扱わない。

4 完全有声閉鎖音を持つ言語の例として、フランス語などロマンス語系の現代語を想定している。すなわち、調音を開放する前から十分に声帯振動が起こっており、かつ有気性を伴わないようなものを指す。

5 閉鎖音の調音開放の前に微少な時間鼻音が挿入されることを言う。

6 完全な半有声音ではなく、発音の最初が軽く無声化する。

7 表内注

\*: 1文字で2子音連続を示す文字があるために、この項を設けた。

\*\*:-μφ-, -γξ- は一般的に [-mbz-], [-ŋgz-] と発音される傾向にある一方、[-mɸs-], [-ŋɸs-] となる場合もある。後者の [b], [g] は半有声だが、後続の [s] の影響から [b], [g] の後半部が無声となる珍しい音である。発話速度が上がると閉鎖音 [b], [g] そのものが脱落する場合もある。

8 たとえば語頭に μπ-, ντ- をもつ動詞に加音 e- が加わった場合など。

9 松本(1988)は、語中の閉鎖音の有声無声は鼻音に後続するか否かで相補分布をなし、どのような要素でも -ν + κ-, π-, τ-, ξ-, ψ- の条件下で語頭が有声閉鎖音になるという主張をしている。しかし実際は、冠詞類のようなアクセントをもてない語以外の -ν で終わる語彙に先行されても、後続音は本来の音を保つ場合が多く、Γεωργίου(2000)も条件によって異なると指摘している。

10 ギリシア語で許される語頭子音の組み合わせは規定されており、鼻音と閉鎖音の組み合わせは認められない。

11 語源については Δορμπαράκης(1993)を参考にした。

12 曲用・活用など語形変化している場合でもそのまま挙げる。

## 参考文献

- Γεωργίου, Νάγια (2000) *Ορθοφώνια φωνητική-τράγουδι*: Δεύτερη έκδοση; Εκδόσεις Βεργίνα
- Δημητρά, Δημητρά κ.ά. (1989) *Ελληνικά τώρα 2+2*; Νόστος
- Δορμπαράκης, Παν.Χ. (1993) *Ετυμολογικό-ερμηνευτικό λεξικό της νεοελληνικής: κατά ετυμολογικές οικογένειες*; Εκδόσεις Σπουδή
- Ινστιτούτο Νεοελληνικών Σπουδών (1996) *Νεοελληνική γραμματική (της δημοτικής)*; Αριστοτέλειο Πανεπιστήμιο Θεσσαλονίκης
- Παπακωνστατίνου, Νίκος Δ. (1979) *Αγωγή του λόγου: ορθοφώνια*; Εκδόσεις Δωδώνη
- Τζιτζιλης, Χρήστος (2000) Νεοελληνικές διάλεκτοι και νεοελληνική διαλεκτολογία: in *Η ελληνική γλώσσα και οι διάλεκτοί της*: pp.15-22; Υπουργείο εθνικής παιδείας και θρησκευμάτων
- Holton, David et al. (1997) *Greek: A Comprehensive Grammar of the Modern Language*; Routledge
- Kedra-Blayo, Katerina et al. (1996) *Le nouveau grec sans peine (grec moderne)*; Assimil
- Ohly, Rajmund et al. (1998) *Język suahili*; Wydawnictwo Akademickie DIALOG
- 荒木英世 (1990) 『現代ギリシア語の入門』白水社
- (2001) 『CD エクスプレス現代ギリシア語』白水社
- 木戸雅子 (2002) 『今すぐ話せるギリシャ語 入門編』ナガセ
- 松本克己 (1988) 「近代ギリシア語」 亀井孝他編 『言語学大辞典 第1巻 世界言語編 (上)』 pp. 1424-1427 三省堂

# Les occlusives sonores en grec moderne

Hiroyuki SUZUKI

Cet article traite le problème de la prononciation /b, g, d/, qui, avec l'orthographe moderne, sont écrites  $\mu\beta/\mu\pi$ ,  $\gamma\gamma/\gamma\chi$ ,  $\nu\delta/\nu\tau$ . Sous l'aspect orthophonique, on doit les prononcer comme des nasales + occlusives sonores, mais en réalité, dans la conversation courante, on admet l'omission de la nasale ou l'addition de la nasale légère devant l'occlusive. Ce dernier cas est appelé "prénasalisation," et c'est un phénomène très rare dans les langues européennes. Cette fois, j'ai recherché la prononciation actuelle, en l'analysant, au moyen d'enregistrements de matériels pédagogiques pour les débutants et les apprenants moyens. Et j'ai obtenu les résultats suivants, pour le cas de la tête de mot et celui du milieu de mot:

**en tête de mot** Une seule différence se présente sur la position *accentuée*:

1. **première syllabe** : Dans beaucoup de cas, l'occlusive sonore apparaît. Il y a aussi quelques occlusives demi-sonores.
2. **seconde syllabe** : Il y a trois cas : l'occlusive totalement sonore, prénasalisée, et demi-sonore.
3. **autres cas** : Dans presque tous les cas, l'occlusive sonore apparaît.

**en milieu de mot** Deux différences se présentent:

1. **étymologie du mot** : Il existe trois catégories : le mot authentiquement grec, l'emprunt, et le nouveau mot étranger. Apart dans le dernier des trois exemples précédents, les variantes existent.
2. **position accentuée** : S'il existe une variante sur la nasale, plus l'accent est mis loin de la nasale, plus elle peut être facilement omise.

Le point le plus important de chaque condition précédente, cependant, est la relation avec la rapidité de parole. En élocution lente, la prononciation peut maintenir la "nasale + occlusive," et plus on parle vite, plus la nasale a tendance à s'affaiblir ou à être omise. Ces résultats originaux peuvent permettre d'approfondir ce domaine de la phonétique du grec moderne.